

忘で発症し、CT、MRIにて右蝶形骨縁内側部、側頭葉内に異常陰影を認めた。脳血管撮影では、同側の眼動脈、内頸動脈、中硬膜動脈、正円孔動脈を流入動脈とし、隣接する硬膜静脈洞とは交通せず、venous lakeを介して Labbé 静脈に流出する dAVS を認めた。術前塞栓術により血流を減少させた後開頭術を行った。硬膜を切開すると、怒張し red vein となった脳表の静脈と病変部とは1本の異常血管を介して結合しており、これを clip にて閉塞すると脳表の静脈は虚脱化した。術中 DSA にてシャントが消失したことを確認し、手術を終了した。術後経過は良好であった。頭蓋内静脈と直接の交通のみを有する dAVS Type III 及び IV は頭蓋内出血の危険が高い疾患であるが、シャント部位を静脈側から閉塞するだけで完全治癒が期待できるので、適確な術前診断と治療計画が肝要であると考えられた。

2A-109) Ponto-medullary Cavernous Angioma の全摘の1例

相馬 勤・入江 伸介 (市立札幌病院)
奥山 徹・北見 公一 (脳神経外科)
土田 博美・竹田 保 (脳神経外科)

MRI 導入以後、脳幹部海綿状血管腫 (BSCA) はその特徴的所見によって比較的容易に診断されるようになってきた。BSCA の治療としてガンマーメスは現時点では否定的とする見解が多く、出血を繰り返す BSCA の治療法として適応に関しては controversial とする意見もあるが、手術有効例の報告が多い。今回、我々は pontomedullary junction の腹側部に発生した直径 1.5 cm の海綿状血管腫を全摘する機会を得たので、ビデオを供覧し若干の文献的考察を加え報告する。症例は20才の男性。4年前に初回出血発作あり、CT、MRI で橋・延髄腹側の BSCA を思わせる所見あり、神経学的には左片麻痺、右外転神経麻痺を呈したが保存的治療で徐々に改善。今回、同様の神経症状を呈する2回目の出血発作で入院。Lateral suboccipital approach で全摘、病理組織は海綿状血管腫であった。術後経過は良好で神経症状の著明な改善を認めた。

2A-110) 顔面痙攣に対する EPTFE による椎骨動脈転置の1例

松崎 隆幸・嶋崎 光哲 (函館赤十字病院)
早瀬 一幸・伊藤 靖男 (脳神経外科)

半側顔面痙攣 (HFS) に対する神経血管減圧術のうち

ち、もっとも手術的に困難性を有するのは椎骨動脈が責任血管の場合と思われる。治癒率も低く、再発の可能性も一番多いとされる。血管と神経の dislodge のためには prosthesis の工夫、あるいは、テープを使つての SLING 法や Clip を用いる方法などが報告されているが必ずしも確実性をもった画一の方法とはいえない。今回 EPTFE (人工血管) を使用し良好な結果を示した1例につきビデオを供覧する。症例は、55歳女性で1年以上の痙攣のエピソードがあり1992年8月30日に外来受診した。セルソン®で経過をみるも寛解せず10月12日入院となった。血管造影では椎骨脳底動脈の高度の迂曲を認めた。10月14日の手術後、痙攣は消失した。穿通枝がある場合の太い血管の転置には人工血管が有用であると思われる。

2A-111) Craniotome を使用した黒川式椎弓形成術

加藤 甲・飯塚 秀明 (金沢医科大学)
角家 暁 (脳神経外科)

椎弓形成術は、靱帯骨化症や脊柱管狭窄症などによる脊髓症に対して広く行われ、その術式も数多く報告されている。この中で黒川により提唱された方法は、棘突起の正中を縦割して椎弓を開き脊柱管を左右対称に拡大するもので、機能解剖学的に理想的な方法とされている。しかし本法の適応症例では、脊髓後方の間隙が狭いため棘突縦割の際、内板の切離に熟練を要し、drill を用いても手術操作は困難である。そこで我々は、脳神経外科医にとって使い慣れた craniotome を用いて棘突起を縦割することを考案した。Craniotome 先端を縦割する棘突起基部の吻側に置き、尾背側に持ち上げるようにして移動する。この操作で容易に且つ speedy に、脊髓を損傷することなく安全に棘突起を縦割することができる。また drill を使用した際のような掘削溝の幅が広くなりすぎて、棘突起側壁が折れるようなこともない。左右に開いた棘突起間には hydroxyapatite 製棘突起 spacer を挿入締結して閉創する。

2A-112) Cerebral Three-dimensional CT Angiography (3D-CTAG)

田邊 純嘉・端 和夫 (札幌医科大学)
脳神経外科

昨年より spiral CT による 3D-CTAG が検査可能となったため、我々は頸部・頭蓋内血管性病変と脳腫瘍